# 令和８年度（第５回）オーストラリア・ニューカッスルグローバル研修
# 成果報告書

| | |
|---|---|
| 研修目的 | ①　グローバル社会における課題，多文化共生社会の現状，オーストラリアの文化・遺産について，直に協定校ニューカッスル大学教員の特別講義及び研修期間中の実地から学び，また，その根幹となる言語（英語）学習により，自らの考え・意見を伝える力及び異なる背景・意見をもつ人々への理解・尊重する精神を養う。<br>②　海外の学生と共に学ぶ学習や交流プログラム等を通して，異文化理解やコミュニケーション能力の向上を図る。<br>③　様々な学部等から参加する学生とともに，本学初の海外拠点があるニューカッスルやオーストラリアを知ることを通して，多様な価値を受容し，自己の立場・役割を認識する力を伸ばす。 |
| 研修場所 | ① 日本大学ニューカッスルキャンパス 教育棟<br>所在地：オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州ニューカッスル市<br>② ニューカッスル大学及びニューカッスル大学国際教育機構<br>(College of International Education)<br>所在地：オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州ニューカッスル市<br>ニューカッスル大学カラハンキャンパス |
| 所在地 | オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州ニューカッスル市 |
| 研修期間 | 令和８年８月２４日（月）～９月１３日（日）２１日間 |
| 研修内容 | ①　講義（各講義は事前研修を含む５時間）<br>※ニューカッスル大学教員による本研修のために特別に用意された内容でオーストラリアにおけるグローバルな課題及び多文化共生社会に関するテーマを扱う。また講義受講に当たり，事前と事後学習を実施する。<br>(1) Global Issues（グローバル課題について）<br>(2) Indigenous Australia（オーストラリアの先住民について）<br>②　実地研修（５時間）<br>(1) ニューカッスル市内の地理，歴史，交通，環境等を歩いて学ぶ研修<br>(2) ニューカッスル大学カラハンキャンパス Wollotuka 研究センターでの研修<br>※同センターの教室を使って行われる講義「Indigenous Australia」後に，同センター内の見学，関係者によるプレゼンテーション及び意見交換等により，先住民に関する理解を深める研修<br>(3) ニューカッスル大学カラハンキャンパスの研究ラボ（言語学分野予定）を訪問し海外の大学の実情を見聞する研修<br>③　語学研修（語学授業４１時間（語学オリエンテーションを含む），交流プログラム９時間，合計５０時間）<br>(1) 現地で留学生向けに開講されている英語クラス（English Language Bridging Program(略称 ELBP)）に参加し，能力別クラスで英語の４技能（Speaking, Listening, Writing, Reading）を学ぶ。多様な国々からの留学生と勉学を共にすることにより，語学知識の修得にとどまらず，異文化や多様性を意識したコミュニケーション能力を有する人材育成を行う。<br>(2) 本学に用意されたニューカッスル大学の学生との交流プログラム（Student-led Cultural Exchange Activities（通称 SEP））を通して，教室で学んだ英語の実践やニューカッスルとのつながりを構築する。<br>④　事前及び事後研修<br>研修参加の条件として事前研修への参加を義務付け，計 2 回実施。また， |

| | |
|---|---|
| | 事後研修については，研修報告書の提出及び職員によるフィードバックをもって実施。なお，自由参加による事後研修を実施予定。 |
| 単位認定 | 有　※ただし所属学部等により異なる。 |
| 参加者の人数 | ３０名 |
| 補助等 | 日本大学校友会から参加者全員に対し，航空運賃相当の寄付を受領 |

【学生による研修報告書】

所属学部・研究科　　理工学部
氏名　　S さん
研修期間　　２０２６年8月２４日（月）～9月１３日（日）

私は本研修を通し、多様な価値観に触れることによって、特に異文化理解と意思疎通のあり方について多くを学べた。ニューカッスルでの生活の中では、慣れた日本の感覚や価値観が必ずしもあてはまらず、現地の習慣を理解し実践することが必要であった。日常の会話や授業では、発言しない限り自分の意見を持たないと受け取られ、自分の意見の主張をしてはじめて評価されることを実感し、意見の発信をより意識するようになった。他にも、バス降車時に運転手に感謝を伝える習慣、後から来る人のためにドアを開けておく習慣など、日常生活の中でも日本との差異が多くあり、滞在時には現地の習慣を積極的に生活に取り入れていた。

University of Newcastle（以下 UoN）では、出身国や年齢、母語の異なる多様な学生や教職員と交流する機会が多くあり、ニューカッスルでの生活や進学・就職事情などについて話すことができた。これらの交流の中で UoN に在籍している方たちの間にも多様な英語の訛りや癖があり、正確な英語を話すことだけがコミュニケーションではないことを感じた。UoN では、流暢な英語でなくても会話できる環境が整っていたため積極的に会話し、どのような語順であれば伝わりやすいかなどの、実践的な英語を身に着けることができた。また、現地の学生とスポーツや音楽、景色、建築などを同じ空間で体験を共有する中で、言語を用いずとも共感できることも実感した。不慣れな英語での会話を一日に数時間続けることには重い負荷を感じたが、それ以上に自分の考えが相手に伝わり、相手の考えを理解できたことに非常に大きな達成感を覚えた。

私は学部卒業後に国外の大学院に進学したいと考えているが、本研修はそのような私にとって非常に有意義なものとなった。実際に学生として国外の大学で講義を受け、交流を通して海外の大学・大学院事情を知ることができ、留学についての解像度が高まった。また、多様な人々と接することで得られた柔軟な姿勢と意思伝達能力は、他者との対話によって計画を吟味する建築設計において、不可欠であると確信している。

最後に、このような機会を企画、実施してくださった教職員・関係者の皆様、多くの刺激を与えてくれた学生の皆様、そして経済的なご支援をいただいた日本大学校友会の皆様に深く感謝の意を表する。